

2013.8.4 演奏会プログラム

中川 岳 （教養学部2年）

J. S. バッハ (1685 - 1750) トッカータニ短調 BWV913

工藤 哲朗

ゲオルク・ベーム (1661-1733) 「天にまします我らの父よ」

相川 拓也 （総合文化研究科博士課程）

G. F. ヘンデル (1685 -1759) (グーアン編曲) : 歌劇「セルセ」 HWV 40 よりレチタティーヴォ
「しなやかに美しい梢」とアリア「かつてこんな木陰はなかった」

作曲者不詳 : 彼女は僕の苦しみを (『フィッツウィリアム・ヴァージナル曲集』より。
原曲 J. ダウランド (1563 -1636))

H. パーセル (1659? -1695) (ボニトー編曲) : 歌劇「ダイドーとイニーアス」より
アリア「私が地中に横たえられるとき」

平澤 歩

J. S. バッハ (1685 -1750) 前奏曲とフーガ ハ短調 BWV549

ヨハン・パッヘルベル (1653 - 1706) 3声のカノンとジーク ニ長調よりカノン

貝田 龍太

フェデリコ・モンポウ (1893 - 1987) コンポステラ組曲 より コラール

シャルル・トゥルヌミール (1870 - 1939) 神秘のオルガン より senza rigore

<解説>

中川 岳

バッハは手鍵盤のためのトッカータを7曲残しています。これらはバッハの作品の中でも初期の時代に属するもので、彼の20代の頃の作品とされています。ちょうど今日の演奏会の出演者たちと同じぐらいの年代です。本日はその7つのトッカータのうち最も規模の大きい、ニ短調のトッカータを演奏いたします。即興的なパッセージ、大胆な転調、歯切れの良いリズムのフーガなど、聴きどころの多い情熱的な曲です。どうぞお聴きください。

工藤 哲郎

今回演奏する曲、《天にまします我らの父よ》はルター派の教会で歌われる同名の讃美歌、コラールを編曲した作品です。作曲者のゲオルク・ベームは中部ドイツで活躍し、バッハの師匠としても知られています。彼はオルガンのためのコラール編曲作品を多く残し、《天にまします我らの父よ》の編曲も3曲残していますが、今回はその3曲をまとめて演奏します。それぞれの編曲の違いをお楽しみ頂ければ幸いです。

相川 拓也

本日演奏する3曲は、16世紀から18世紀のロンドンで生まれた歌の、鍵盤楽器のための編曲です。

1曲目はヘンデルのオペラ「セルセ」からの有名なアリア、2曲目は、イングランドの宮廷で歌われたジョン・ダウランドの歌、3曲目は、ヘンリー・パーセルのオペラ「ダイドーとイニース」から、クライマックスのアリアです。編曲者は、1曲目と3曲目が現代の音楽家、2曲目のダウランドは、17世紀初頭ごろの、名前の伝わっていない誰か、です。

オルガンによる歌の音色を楽しんでいただけるよう、演奏いたします。

平澤 歩

前奏曲とフーガ ハ短調 BWV549

前奏曲では、躍動感あふれる足鍵盤のソロから始まり、8小節の後に手鍵盤がそれを模倣しながら動き始めます。以後、何となく落ち着かない不安定な雰囲気を展開し続け、そして、フーガの出現を予感させる形で一応の結末に至ります。

続くフーガは、主題旋律の力強さが印象的な小曲です。バッハのフーガとしては珍しく単純な構造ですが、畳みかけるように次々と主題が繰り返されます。主題の迫力を味わって頂きたいと存じます。

3声のカノンとジグ ニ長調よりカノン

いわゆる「パッヘルベルのカノン」です。数年前にリコーダーを吹く加藤少年と合奏しましたが、最近、加藤少年が遊んでくれないので、一人でも弾けるように編曲しました。

貝田 龍太

20世紀に書かれた「静かな曲」を2曲演奏いたします。音楽によって静かさを表現するというのも妙な話ではありますが、20世紀になると、静かさの表現に重きを置く作曲家が次々と現れ、細々と、しかも着実に成果を残しました。

モンポウは、20世紀スペインの重要な小品作家で、抑制された表現を持ち味としました。コンポステラ組曲はギターのための作品ですが、それをあえてオルガンで弾いてみます。

トゥルヌミールの神秘のオルガンは、バッハのすべてのオルガン曲を合わせた長さに匹敵するという空前絶後の大作でありながら、極めて内面的で精神性の高い作品です。あまり全貌が知られているとは言えない作品ですので、ぜひその一端に触れて頂きたいと思います。